

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 19日現在

機関番号：32663

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23830078

研究課題名（和文） 認知症高齢者グループホームにおける入居前アセスメントと入居時ケアに関する研究

研究課題名（英文） A study on the assessment before entry and the initial care of the group home for elderly with dementia.

研究代表者

辻 泰代 (TSUJI YASUYO)

東洋大学・ライフデザイン学部・助教

研究者番号：20611388

研究成果の概要(和文):入居後もその人らしい生活を送るための支援のあり方を検討するため、グループホーム（以下GH）における入居前アセスメントと入居時ケアの現状について、GHの職員・入居者本人・家族介護者という三者の視点から明らかにした。入居前面接の場は、三者ともに緊張状態にある。入居時ケアに活用できる情報の的確なアセスメントには、入居確定後入居日までの間に、再アセスメントの場を設けることが望ましい。入居後もその人らしい生活を送るためには、これまでの暮らしぶりや人間関係の築き方、ADLや病歴を含む健康状態をアセスメントし、入居時ケアに繋げることが望ましいと考えられた。

研究成果の概要（英文）: To examine the support for the life of personhood after the entry to the group home, it clears the assessment before entry and the situation the initial care from the viewpoint of three persons ; group home staff, person with dementia and caregiver of the family. In the interview before entering the group home, three persons can be nervous. It is desirable to carry out the assessment again before his entry and use this information at the initial care. To keep the personhood and have a self-support daily life in group home, it is preferable to carry out an assessment of the history of person's life, the way of having a relation with others and person's health condition, and to use those information effectively.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：認知症高齢者、グループホーム、入居前アセスメント、入居時ケア、その人らしさ

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者は、入居などの環境変化に伴うリロケーションダメージを起こしやすい。そのため、特に入居時はこれまでの生活環境を出来る限り崩さずに、入居後の生活に繋げていくことが重要であると考えられる。また、ニーズを言語化出来にくくなっていく認知症高齢者にとっては、本人からの情報収集だけでなく、これまでの生活ぶりを知る者からの入居前アセスメント情報を手がかりに、入居時ケアを行うことが望ましいと考えられる。

これまでの先行研究では、認知症対応型共同生活介護（グループホーム、以下GH）入居後の初回アセスメントに焦点を当てた研究は見られているが、入居前アセスメントとして、GH入居前に誰からどのような情報を収集し、どのように入居時ケアに繋げるのかという部分に焦点を当てた研究はほとんどみられない。生活歴の重要性を指摘するものは多く見られるが、具体的に生活歴の中のどのような情報を聞き取ることで入居時ケアに活用出来るのかは、明らかにされていない。また、認知症高齢者がリロケーションダメージを起こしやすいことは明らかにされているが、入居時に焦点を当てた研究は少なく、GHにおいて入居時にどのようなケアが行われているのか、入居時ケアの実態も明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、認知症高齢者GHにおける入居前アセスメントと入居時ケアの現状を明らかにし、GH入居後もその人らしい生活を送ることが出来るための支援のあり方を検討することである。GHの施設長および介護職員、入居者本人、家族介護者の、3者の視点から、望ましい入居支援を明らかにする。

3. 研究の方法

研究をすすめるため、(1)「GHの施設長・介護職員からみた入居前アセスメントと入居時ケア」、(2)「家族介護者からみた入居前アセスメントと入居時ケア」、(3)「入居者本人からみた入居前アセスメントと入居時ケア」、という3つの柱を立てて、調査を実施した。

倫理的配慮として、東洋大学ライフデザイン学部研究倫理等委員会の審査により承認を得て、許可された計画に基づいて調査を実施した。調査開始前に、GHの施設長に調査実施の同意を得た。調査対象者には、研究の目的・方法・協力の任意性・秘密保持・個人情報保護等について、文書および口頭で説明を行い、同意を得て実施した。

(1)「GHの施設長・介護職員からみた入

居前アセスメントと入居時ケア」

研究目的：GHにおける入居前アセスメントと入居時ケアの実態と、望ましい支援のあり方について、施設長および介護職員側の視点から明らかにする。

調査方法：半構造化面接法によるヒアリング調査。個室での個別面接形式で実施した。

調査対象者：関東にあるGHの中でヒアリング調査の依頼を行い、研究協力が得られた11箇所のGHの施設長11名・介護職員18名。介護職員については、入居の受け入れを経験したことがあることを条件として、施設長から推薦された者を対象者とした。

分析方法：対象者の同意を得て録音したICレコーダーのデータから逐語録を作成した。その後、佐藤郁哉の質的データ分析法を参考に、定性的コーディングを行い、概念的カテゴリーを見出した。認知症介護経験が10年以上で、本研究の調査対象者ではない認知症ケア専門家2名によるエキスパートレビューにより筆者の分析結果が妥当と評価を得た。調査期間：2011年9月7日～2012年10月21日。

(2)「家族介護者からみた入居前アセスメントと入居時ケア」

研究目的：GHの入居を経験した家族介護者が、入居前アセスメントと入居時ケアをどのように捉えているのかを明らかにし、望ましい支援のあり方について、家族介護者の視点から明らかにする。

調査方法：半構造化面接法によるヒアリング調査。個室での個別面接形式で実施した。

調査対象者：調査(1)の対象である関東の11箇所のGHのうち、調査期間中にGHへの入居を経験した家族介護者であり、同意の得られた3箇所8名の家族介護者。

調査期間：2012年2月26日～2012年11月24日。

(3)「入居者本人からみた入居前アセスメントと入居時ケア」

研究目的：GHの入居を経験した入居者本人が、入居前アセスメントと入居時ケアをどのように捉えているのかを明らかにし、望ましい支援のあり方について、入居者本人の視点から明らかにする。

調査方法：半構造化面接法によるヒアリング調査。個室での個別面接形式で実施した。

調査対象者：調査(1)の対象である関東の11箇所のGHのうち、調査期間中にGHへの入居を経験した入居者であり、同意の得られた3箇所6名の入居者。

調査期間：2012年2月26日～2013年1月12日。

4. 研究成果

(1)「GHの施設長・介護職員からみた入

居前アセスメントと入居時ケア」

①入居前アセスメントにおいて重要な役割を果たすと考えられる、面接の実態を明らかにした。

入居前面接は、全てのGHにおいて、入居候補者本人と家族を対象に実施されていた。GHは少人数の共同生活の場である。そのため、入居候補者本人の様子を、必ず面接を通してアセスメントしているのではないかと考えられた。面接を実施する場所としては、入居候補者である本人の自宅で行うことを基本としている所が10箇所、基本的にはGHで行う所が1箇所あった。面接を必ず自宅で行うように意識的に取り組んでいる所もあれば、これまで生活してきた暮らしの場を見ずに、入居に至る場合もあることがわかった。また、本調査では、施設長や社長、GHのトップであるリーダー等、役職のある者が、単独または複数で入居前面接を実施している所が11箇所中7箇所あった。残りの4箇所は、施設長とユニットリーダー・主任など役職のある介護職員と2人で実施していた。つまり、実際の介護現場で入居者に最も接する機会が多いと考えられる役職のない介護職員は、入居前面接には立ち会っていないということになる。これまでの先行研究でも、施設長など役職のある者を中心とした面接が行われる傾向にあることが明らかになってきたが、本調査でも同様の結果となった。この要因としては、GHを経営するにあたり、空室期間はGHの赤字となってしまうため、出来るだけ迅速に最適な入居者を選定する必要があるということが考えられる。また入居前の面接には、最適な入居者を選定するという目的と、入居後のケアに必要な情報を得る目的という、2つの目的があると考えられる。多忙な介護現場では、限られた時間の中で、入居者の選定と、その人らしい生活を送るために必要な情報収集を一度の面接で兼ねる必要があるため、現場の介護職員ではなく、施設長や社長などの役職のある者が面接の実施担当者になっていると考えられた。

入居選定を目的とした一度の面接では、その人らしい生活を送るために必要な情報までは聞き取りが困難であると考えられる。

②入居候補者本人または家族の見学の位置づけについても、GH毎に違いがみられた。入居申し込みをする前に必ず本人または家族に見学をしてもらうという所が4箇所、申し込み時または申し込み後入居までの間に本人または家族に見学をしてもらうという所が5箇所、入居が決定した後入居日までの間に必ず本人に見学をしてもらう所が2箇所あった。入居申し込みをする前に必ず見学をしてもらうという4箇所のGHでは、家族のみで見学をすることが多く、本人はほとんど来ないという意見が聞かれた。申し込み時

または申し込み後入居までの間に見学をしてもらうという5箇所のGHでは、本人の見学の割合に差がみられ、全入居者のうち見学をした入居者が約2~5割という所もあれば、ほぼ全入居者が入居日までの間に見学している所もみられた。入居候補者本人が入居先を知らずに入居が決まる現状もあるということが明らかになった。

③その人らしい生活を送るために施設長・介護職員が特に必要だと認識している入居前アセスメント項目、入居前アセスメントの課題、GHで行われている入居時ケアについて明らかにした。

その人らしい生活を送るために施設長・介護職員が特に必要だと認識しているアセスメント項目としては、①入居前の生活習慣、②入居前の生活環境、③これまでの生活歴、④趣味・嗜好、⑤他者との関わり方、⑥健康状態、という6つの概念的カテゴリーが見出された。入居前アセスメントの課題としては、①家族からの情報収集の困難さ、②独居者等の情報収集の困難さ、③利用していたサービス機関からの情報収集の困難さ、④医療的な情報収集における困難さ、⑤入居後再アセスメントの必要性、⑥情報を活用する介護職員のスキル不足、という6つの概念的カテゴリーが見出された。GHで行われている入居時ケアについては、①生活のこだわりを継続するケア、②なじみの関係づくりへのケア、③共同生活の理解を促すケア、④BPSDへのケア、⑤入居直後の事故を防ぐケア、⑥試行錯誤のチームケア、という6つの概念的カテゴリーが見出された。

入居前の状況を知る家族やサービス機関、医師などから得られる情報には限界があることが明らかになった。特に、独居者等においては、必要な情報を得るのに苦慮している様子がうかがえた。入居前面接を受ける家族の気持ちとして、どうしても入居をしてもらいたいという気持ちから、面接時に不利になりそうな情報はあえて言わないこともあるのではないかと語る施設長もいた。

これらのことから、入居時ケアに活用できる情報の的確なアセスメントには、入居確定後入居日までの間に、二次面接や入居予定者本人の見学の場を設けるなど、再アセスメントの場を設けることが望ましいと考えられた。入居候補者がGHを入居前に訪れることで、入居に向けての気持ちの整理がつくとも考えられ、また、迎え入れる介護職員にとっても、本人の様子を事前に確認出来ることはメリットが大きいと考えられた。入居後もその人らしい生活を送るためには、これまでの暮らしぶりや人間関係の築き方、ADLや病歴を含む健康状態をアセスメントし、入居時ケアに繋げることが望ましいと考えられた。

(2)「家族介護者からみた入居前アセスメントと入居時ケア」

①面接を中心とした入居前アセスメントの様子について、家族介護者の視点から明らかにした。

入居前面接でのアセスメント項目のうち、聞いてもらえてよかったと家族介護者が感じた項目は、これまでの生き立ち・好きな食べ物・好きなこと・趣味などであった。また、面接中に職員が本人の歩行状態を観察している様子が印象に残っていると答えた方も2名いた。面接でさらに聞いてほしかった項目としては、性格・今までの病気・プライドが高いということなどが挙げられた。また、面接では直接聞かれなかったが、入居前にこれまでの生き立ちなどをアンケートで提出するGHもあり、そのアンケートを記入するための聞き取りとして、本人から昔の話を深く聞くことが出来てよかったと答えた家族の方もいた。面接時の家族の心境としては、「包み隠さず言った方がお互いのためになるかなと思った」と答えた一方で、「もしかしたら断られるかもしれないというのがあった。」「入れてもらいたい一心で、多少引き算して言ったのかもしれない。」と、揺れ動く素直な気持ちを答えた方もいた。

入居前面接を受ける家族は、入居出来るかどうか分からないという状況の中で、聞かれた質問には答えつつ、本人の様子や職員の目の動きにも敏感に反応していることが推察された。入居出来る分からない状況では、不利になることは言わないということも予測される。そのため、入居前面接の際は、可能な限り入居の可能性がどの位かを伝えた上で、情報収集出来ることが望ましいと考える。特に、入居希望者が多く、入居者の選定に時間がかかる場合では、そのことを正直に伝えた上で情報収集を行い、入居が確定してから入居日までの間に改めてより細かい情報収集が出来る環境を作ることが望ましいと考える。

②入居前後の心境と、家族介護者が必要とする入居時ケアについて、家族介護者の視点から明らかにした。

本調査の対象者である家族介護者は、福祉専門職や知人からの紹介によりGHを知り、見学を経て入居を選択していた。8名の対象者のうち、5名は本人と家族で見学を行っていたが、残りの3名は、仕事の関係や、別の家族のことも同時に介護しているなどの状況から、本人と一緒に見学することが難しく、家族のみで見学していた。「ケアマネからGH見学を勧められた時は、他人事のような感じだった」、「親戚に指摘されるまでおかしいと思わなかった」と答えた方もいた。家族は、入居後も、入居を選択したことについて揺れ

る気持ちがあった。家族は、本人の性格や生き立ち等を尊重した入居時ケアを望んでいた。

家族介護者は、身近にいるため本人の認知症の程度を実際より軽く評価する傾向にあり、他者からの紹介により、初めてGH入居を検討し始めたことがわかった。見学時やGHへ最初に問い合わせる時点では、GHのイメージが出来ていない可能性もあるため、家族介護者に対し、GHでの生活がイメージできるようにさらなる情報提供が必要であると考えられる。また家族は、入居後に精神的にほっとする一方で、本当は自分が見るべきだったと負い目を感じていることもわかった。入居後の家族介護者への精神的な支援も、重要な入居時ケアであることが示唆された。

(3)「入居者本人からみた入居前アセスメントと入居時ケア」

入居前後の心境と、入居者本人が必要とする入居時ケアについて、入居者の視点から明らかにした。

入居することを理解した上で入居した方と、入居を家族などから知らされずに入居した方がいることが明らかになった。入居したことについて、「家にいるほうがいいですね」、「故郷へ帰りたい」という想いを語る方がいた。一方で、「若い人には若い人の生活があるし。どなたかの助けが必要になってくるし。同年代の人と一緒に生活することもまあいいじゃないかと思って」や、「子供もそう言うし、私もそれに説得されちゃって」と語る方もいた。

入居者の中には、自宅などで暮らし続けたい想いがある一方、家族や自分自身の体のことを考え、入居について折り合いをつけている方もいることが明らかになった。

また、入居後の心境について、「知らない人と初めて仲良しになっていく」、「(GHにいたら)さみしくない」、「もう慣れました」と言う方もいた。また、入居前の見学で雰囲気がいいたいわかっていたので、「こういうものかという感じだった」と答えた方もいた。次に新しく入居する方を想像し、「クラスに新しい人が転入してくるみたいなのでしょうからね。」と話し、「後からポツツと一人で入っていらっしゃる方があったら、気を遣ってあげないと。」「元々いらっしゃる方何人かの方に、今度こういう方が入っていらっしゃいますから、よろしくねっていうのは、スタッフの方から、お願いするそういう感じじゃないかなあ。」と話した方もいた。

入居者本人の視点から、新入居者を迎え入れる際の配慮の仕方を聞くことが出来たことは、入居時ケアを考える際の貴重な意見であった。

今後やりたいことや夢については、「音楽が

好き。宝塚を見に行きたい」、「絵のお稽古を続けたい」、「お茶を飲みに行きたい」など、これまでの趣味などを入居後も継続したいという声が聞かれた。中には、「今やっていることで十分」、「面倒になった」、「長生きしたら上等」という声も聞かれた。

介護職員や家族介護者も述べていたように、入居者自身も、これまでの生活の中で大切にしてきた趣味などを入居後も継続したいと考えていることが明らかになった。入居後もその人らしい生活を送るための入居前アセスメントとして、これまでの暮らしぶりや趣味などを把握し、入居時ケアに繋げることが重要であるということが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 辻泰代:「認知症高齢者グループホームにおける入居支援についての一考察—入居前アセスメントと入居時ケアに焦点をあてて—」、『ライフデザイン学研究』、第8号、pp197-221、2012、査読有

[学会発表] (計1件)

- ① 辻泰代:「認知症ケアにおける「その人らしさ」の質的分析と支援のあり方についての一考察—認知症高齢者グループホーム施設長の認識に焦点をあてて—」、『第20回日本介護福祉学会大会 発表報告要旨集』、pp86、2012. 9. 22～23、京都女子大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻 泰代 (TSUJI YASUYO)

東洋大学・ライフデザイン学部・助教

研究者番号：20611388

(2) 研究分担者 (0)

(3) 連携研究者 (0)